

室本上田敏全集

定本 上田敏全集 第一卷

海潮音
牧羊神
拾遺篇

編集委員

矢野 峰人
嘉治 隆一
島田 謹二
松村 縁
森 亮
安田 保雄
劍持 武彦
佐々木 満子

昭和五十三年七月二十五日 發行

定本 上田敏全集 第一巻

定價 一四〇〇圓

責任編集 上田敏全集刊行會
(代表) 矢野 峰人

發行者 柴崎 芳夫

發行所 株式會社 教育出版センター

東京都豊島區北大塚三一二九—二
電話〇三一九一七八九三〇代

限定五〇〇部の内

Ueda Bin Zensyū Kankōkai © 3390-0001-1475

總序

我國近代の學界のみならず文壇の、一大先覺者であり指導者であつた上田敏博士一代の業績は、單行本としてはじめて公にされた『耶蘇』(明治三二(一八九九)より、歿後(大正六(一九一七)の出版にかゝる『現代の藝術』に至る迄、詩文の創作、翻譯をはじめ、評論、考證等、頗る廣範圍に亘つて居る。それらの中、最も廣くまた長く讀まれ、我國文學の興隆と、内外の新文藝の理解、味讀、鑑賞等の能力養成とに貢獻する所最も大であつたのが、譯詩集『海潮音』(明治三八(一九〇八)と、これに次ぐ『牧羊神』(大正九(一九二〇)とである事は、更めて言ふ迄も無い。博士唯一の創作小説である『うづまき』(明治四三(一九一〇)の再版が、『みをつくし』(明治三四(一九〇一)の大部分と併せて一卷としてではあるが、昭和に入つてから(昭和二五)、新裝して世に出た事は、京大に於ける公開の連續特別講演の筆記を整理した前記『現代の藝術』が、二四年に出、更に三年後の二七年(一九五二)文庫本の一冊となつて出版された事と共に、むしろ例外的な現象と言ふべく、文學の研究に従事する眞剣な學徒の執るべき根本的態度とか、それに必要な諸條件を説くと同時に、泰西文海の新潮をいちはやく紹介・論評する事によつて時人を啓蒙する所大であつた『文藝論集』(明治三四(一九〇二)、『文藝講話』(明治四〇(一九〇七)『最近海外文學』(明治三四(一九〇一)同『續篇』(明治三五(一九〇二)等に至つては、殆ど孰れも版を重ねる事なくして

埋もれたやうである。特に、新體の散文や散文詩の興隆を促す意圖を以て試みられた近代歐米文學の翻譯を収めた『みをつくし』は、時期尙早のためか、一部少數者以外には知られず、版權の關係上、その一部分を省いた前記重版が出た時には、我が讀書人の興味は、既に、ダナンツィオ、ツルゲネーフ、ゴーゴル、ロチ、モーパッサン等から離れて居り、アラルコンとかアイク・マーヴェル等に至つては、おそらく其名すら聞いた事が無く、従つて彼等に對しては何等の關心もなかつたといふのが實情であつたと言つても過言ではあるまい。ストリンドベルヒの『父親』が『新小説』に譯出されたのは、四〇年（一九〇七）一月の事であるが、當時の我が劇壇、従つて評論界の關心も、イブセンに集中せるかの觀を呈してゐたので、彼と正反對の立場に立つ者と一般に解せられてゐた此の作家は、これ亦時期尙早の爲か、殆ど問題にされなかつたやうである。尙、ストリンドベルヒが、敢へてこの「異狀」「悲慘」なる題材を採り上げた理由は、『親父』の冒頭に置かれた「悲劇『ゆり子』序」に述べてあるが、これ亦小序なるが故に、おそらく顧みられなかつたものと思はれる。

このストリンドベルヒの『親父』とかアンドレイエフの『心』の如きあまりに特殊・異常なのは別として、一般の關心は、専ら題材面の新奇性と構成ぶり如何の問題に對して拂はれ、用語とかスタイルとかの如き、表現の妙味に至つては、殆ど無視された形であつた。そして、この風潮は、意外に長く續いたかの觀があるが、これは偏に、作家も讀者も、新奇なるものを求める事

に急であつた爲と思はれる。

作家側讀者層の要求は如何にもあれ、國文學の革新增強を圖るため、海外最新思潮の動向を察知洞察して、これが紹介移入に努め、よくその所期の目的の實現に成功せる博士の偉業は、文字通りユニークなものと言つてよい。

單なる新著新聲の紹介ならば、海外文海の新潮・藝苑の新風に注意を怠らない限り、蜚蜚存在に過ぎない一介のジャーナリストと雖も、能くこれを爲し得るであらう。然し、上田博士のそれは、彼地に於てさへ聲價未だ定まらざるうちに、早くも新進作家の將來性を看破して、これを紹介し、時には、進んでその秀什を譯出して示したのであるから、その眼力には、到底餘人の及び難いものがあつた事は、何人と雖も否定し得ないであらう。

「ベルグソンには棕櫚を與へよ、クロードルには桂を捧げよ」といふ言葉は、たまたまそれが新聞紙（大正三年一月『大阪朝日』所載「文藝の最新傾向」）に現れたため、忽ち有名になり、後々迄久しく人々の口にする所となつたが、これは正に、明治三十八年十月刊行の『海潮音』の序に於て「譯者十年の昔、白耳義文學を紹介し」と説き起し、「マアテルリンクの如きは、全歐思想界の一方に霸を稱するに至れり。人心觀想の默移實に驚くべき哉」と結べる一節に照應するもの、以て此の筆者が、外國人としては如何に稀有の具眼達識の士であつたかを立證すると言つてよからう。

而も、これら海外文學の紹介は、評論たると翻譯たるとを問はず、鑑賞者としての邦人の視野を擴げ高めると共に、國文學をして常に新鮮味を湛^たへたるものたらしめん事を目的としたものであるから、新文學の理解・鑑賞・評價の仕方等を具體的に示すのみならず、文藝進展の新しい方向をも指示したものであつた。

このやうな學界讀書界の大恩人たる博士一代の業績が、單に譯詩家としてののみ記憶されてゐるかの觀あるは、われわれの等しく遺憾とする所である。更に、我國に於けるいはゆる「文學研究」の多くが、單なる資料の蒐集またはそれらからの拔萃の整理に終り、作家に對する理解とか評價の點に至つては徒らに本國人の所謂權威者の説く所を無條件に信奉し、何等獨自の解釋とか批判の殆ど見られない現狀に對し慨嘆の情を禁じ得ない今日、博士一代の業績全部が、その専門の研究家たる事を以て自他共に許す人々の手により、新しく編まれ、新裝して久々に世に現はれる事となつたのは、眞に慶祝の念に堪へない所である。

想へば、此の偉大なる先覺者の著作が、久しく、或は散逸したり或は埋沒狀態に在つたのを、蒐集發掘の上、整理收録したものを、『上田敏全集』と銘打つて改造社が出版したのは、昭和三年から六年迄、足掛け四個年に亘る大事業で、營利問題を度外視した、社長山本實彥氏の義俠心に依るものであつた。従つて印刷部數も自ら少數に限られる事となつたため、早くも絶版となつて今日に及んだのである。而も、これには、前述の如き逸文のみならず、其時迄その存在すら知

られなかつた多くの評論の斷片的なもの外、學生時代の作品・翻譯・日記・書簡等も數多く收められて居たので、上田敏研究家は勿論、一般文學研究家にとりては必讀の書であり、稀觀書蒐集家にとりては、文字通り垂涎の的であつた。

たゞ、校訂に多少不備な點が有り、誤植は別として、時には數行の脱漏等も有りなどしたため、後世に永く傳へるものとしては、いささか遺憾の念を禁じ得なかつた。また、編纂當時の事情上已むを得なかつた事ではあるが、博士の大學に於ける文學概論とか英文學史の講義等を、聽講學生のノートを其儘收めてあるのは、却つて教授の眞面目を誤り傳へる惧れの多分に有るものとして、むしろ無くもがなの感さへも禁じ得なかつた。といふのは、この文學概論にはその中に度々名の出て來るアメリカの學者ガムリー (Francis B. Gummere, 1855-1919) の *Handbook of Poetics* 『詩學提要』の言葉や引例が其儘移植されてゐる上に、明に聽講生の過失に基づく誤謬、例へば、コールリヂの "Ode to France" の上に、ジョージ・メレディスの詩集に無い同題の詩が追加されて居たり、"Notes on the History of English Literature" として收められて居る英文學史の講案には、パンコースト (Henry S. Pancost) の *An Introduction to English Literature* 『英文學入門』やジュスラン (Jean Jules Jusserand, 1885-1932) の『英文學史』 *Histoire Littéraire du Peuple Anglais* (2 vols. 1894-1904) から引用された文章が、引用符無しに、博士自身の英文と混交して出て來る。元來此の講案は、講義用のメモに過ぎず、講述の際、時折必要に應じて顧

み、話を續けるために用意されたものに過ぎ無かつた。これを、恰も、最初から纏つた著述たらしめる目的で起草されたものであるかの如く、其儘剗削に附す事は、却つて故人を辱しめる惧無しとしない。そこで、今回の新全集には、この英文講案は省く事とした。然し、文學概論も時偶、前記の如き借材が見られるものの、博覽強記、古今東西の文藝を引用する事によつてその發達の徑路とか妙味とかを傳達する點に於ては、無比の觀があるもので、明な誤謬を訂正した上、再録する事とした。また、英文學史の方も、たとひそれが聽講學生のノートに據るものとはいへ、文學と外國文學との關係をたえず念頭に置いて、その特性本質を明にする事に努め、その妙味を自ら體得せしめる點に於ては、「たしかに博士ならでは」の感を新にせしめるものが有るので、今回は改造社版のものの代りに、博士最後の講義即ち、大正四年九月から翌五年五月末迄、第一回生のために講ぜられた「英文學通史」と、第二回生のための「十八世紀後期の英文學」とを収める事とした。

尚、本全集には、改造社版に漏れたるものを、あらゆる面に亘つて探求、收録したので、その點に於てのみでも新版としての意義は十分有るものと信ずる。

昭和五十年晩秋

矢野峰人 識

上田敏全集 第一卷 目次

海潮音
牧羊神
拾遺篇
解説・校訂覚之書・編注

海潮音

序……………二五

ガブリエレ・ダンヌンチオ

燕の歌……………二五

聲曲……………二五

ルコント・ドゥ・リイル

眞晝……………三五

大饑餓……………三五

象……………四

ホセ・マリヤ・デ・エレディヤ

珊瑚礁

三

床

四

出征

五

シュリ・プリュドン

夢

六

シャルル・ボドレエル

信天翁

七

薄暮の曲

八

破鐘

九

人と海

十

梟

十一

ポオル・ズルレエヌ

譬 喩 七

よくみるゆめ 三

落 葉 五

ギクトル・ユウゴオ

良 心 六

フランソア・コペエ

禮 拜 五

キルヘルム・アレント

わすれなぐさ 六

カアル・ブッセ

山のあなた 九

パウル・バルシュ

春 一〇〇

オイゲン・クロアサン

秋 一〇一

ヘリベルタ・フォン・ボシンゲル

わかれ 一〇四

テオドル・ストルム

水無月 一〇六

ハインリッヒ・ハイネ

花のをとめ 一〇七

ロバート・ブラウニング

瞻望 一〇九

出現 一一二

岩陰に 一一四

春の朝 一一六

至上善 一二七

キリヤム・シェイクスピア

花くらべ 一二〇

クリステイナ・ロセッティ

花の教 一二三

ダンテ・ゲブリエル・ロセッティ

小 曲 二四

戀の玉座 二六

春の貢 二六

ダンテ・アリギエリ

心も空に 三〇

エミール・エルハアレ

驚の歌 三二

法の夕 三五

水かひば 三六

畏 怖 四〇

火 宅 四二

時 鐘 四四